

アミガサタケの休耕田栽培試験



1 はじめに

アミガサタケ（広い意味での呼び方は、春から初夏にかけて、民家近くの樹木のまわりなどに発生するきのこです。種類は数十種あるときれ、きのこ（以下、子実体）の形や色の違いから、大きく黄色系の種類と黒色系の種類（以下、黒色種）に分けられます。

アミガサタケは高級食材として知られており、黒色種の一部は中国で大規模に栽培されています。この黒色種は岩手県を含む



図1 試験地

国内にも自生しているため、県内でも栽培できる可能性があります。

岩手県では、中国・雲南省との交流事業を通じて、アミガサタケ栽培に関する技術や知見を学ぶできました（「岩手の林業」第718号）。林業

技術センターでは、これまで菌株の

収集や各種栽培試験を行い、露地、林

床、ハウスなど、様々な条件下で子実

体発生に成功しています（「岩手の林

業」第785号）。一方、近年の海外

のアミガサタケ栽培現場では、同じ

場所で栽培を続けることによる「連作

障害」が問題になっています。その対

策として、水稻（稲作）との輪作が提

案されていますが、日本産のアミガサ

タケが水稻栽培後の水田で発生する

かどうかについては、これまで分かっ

ていませんでした。そこで今回、県

内のきこの関連企業と共同で、休耕

田を利用した栽培試験を行いました。

※「岩手の林業」第718号、78

5号のアミガサタケ関連記事は、

岩手県林業技術センターホーム

ページで公開されています。

岩手県林業技術センター▼研究

成果▼外部刊行物▼林業技術セ

ンター情報 **検索**



図2 高畝区（左）と平畝区（右）



図3 地表に広がった菌糸



図4 発生した子実体（高畝区）

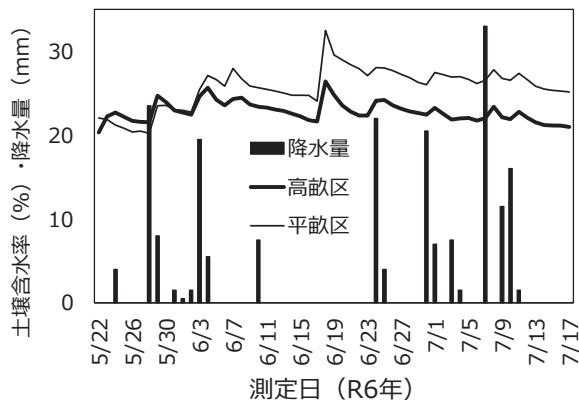


図5 土壌含水率と降水量

地温は、測定期間を通じて両区に大きな差は認められませんでした。しかし、土壌の含水率は平畝区の方が高く推移し、特に6月中旬以降はその差が大きくなりました(図5)。このことから、土壌中の過剰な水分が、子実体の発生に悪影響を及ぼした可能性が考えられます。

最後に、これまで子実体をご提供いただいた皆様、ならびに中国・雲南省の関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

林業技術センター 研究部
成松 眞樹
019 (697) 1536

2 試験地と試験方法

試験は、株式会社長根商店（九戸郡洋野町）関連の休耕田で行いました(図1)。幅0.9m、長さ5m、高さ15cmの畝を造成した区画を「高畝区」としました(図2)。また、同面積の区画の外周に、深さ15cmの溝を掘ったものを「平畝区」としました(図2)。各区画の土壌には、1平方メートルあたり149gの石灰を混和しました。

種菌には、国内で採取した黒色種

アミガサタケの菌糸を培養したものを、令和6年4月下旬に接種しました。接種後は、畝の表面をマルチシートや遮光資材で覆い(図1)、散水は行わず、栄養体の設置等、必要に応じた管理のみを行いました。また、令和6年の5月から7月にかけて、各区画の中央で、地表から深さ3cmの地温と土壌の含水率を測定しました。降水量は、気象庁アメダスの種市観測地点のデータを用いました。

3 結果

令和6年の初夏には、両区画で菌糸が良好に広がっている様子が確認されました(図3)。翌令和7年の3月下旬になると、高畝区でアミガサタケの子実体が、1平方メートルあたり2.2本確認されました。その後、本数は徐々に増え、4月下旬には14.8本に達しました(図4)。一方、平畝区では、4月下旬の時点でも1平方メートルあたり0.2本と、発生はわずかでした。

4 おわりに

今回の試験により、アミガサタケの子実体が休耕田でも発生することを確認できました。この結果から、海外で行われる連作障害対策が、岩手県内でも応用できる可能性が見えてきました。現在は、同じ場所で試験区画数を増やし、同様の結果を得られるか、検証を進めています。なお、安定した栽培の実現には、優れた菌株を一定数保有することが必要のため、さらに菌株を確保することが重要です。今年度も、主に黒色種のアミガサタケを集めておりますので、子実体や情報があれば、ぜひご提供ください。